

eポートフォリオを活用した実践的インターンシップの 産学連携支援に関する考察

A Study on the industry-university cooperation of practical internship using e Portfolio

新目 真紀^{*1}, 半田 純子^{*1}, 長沼 将一^{*1}, 玉木 欽也^{*1}, 小松 大^{*2}
Maki ARAME, Junko HANDA, Shoichi NAGANUMA, Kinya TAMAKI, Masaru KOMATSU
^{*1}青山学院大学ヒューマン・イノベーション研究センター ^{*2}朝日ネット株式会社
^{*1}Aoyama Gakuin University Human Innovation Research Center. ^{*2}Asahi Net, Inc.
Email: maki.arame@hirc.aoyama.ac.jp

あらまし: 専門人材を育成するための実践的なインターンシッププログラムを実施するためには産学の密接な関係が重要となる。本研究では実践的インターンシップを実施するにあたって、準備段階からeポートフォリオを活用することによって、事前研修、実施中の振り返り、事後研修における産学連携を支援した。本実践結果をもとに、実践的インターンシッププログラムにおける効果的なeポートフォリオの活用方法を提案する。

キーワード: 実践的インターンシップ, 産学連携, インターンシップの実施評価, eポートフォリオ

1. はじめに

大学におけるインターンシップ実施割合は年々高くなっている。2013年の文部科学省の調査では、大学全体の約7割が、インターンシップを大学の単位として認定している⁽¹⁾。2011年の中央教育審議会⁽²⁾では、インターンシップにおける地域・産学の連携の必要性が提示され、インターンシップの充実・深化が、キャリア教育の体系化という観点からも重要な政策的課題であることが提示されている。

青山学院大学ヒューマン・イノベーション研究センター (HiRC) は、文部科学省の平成25年度成長分野等における中核的専門人材養成の戦略的推進事業に採択され、ソーシャルメディアやモバイルコミュニケーションを有効活用し、次世代インターネットにおける危険・脅威に対応するための基礎能力を備えた人材育成に取り組んだ。本事業において、インターンシップは、育成プログラムに参画した学生が、中核的専門人材としてのアドバンテージをもって、就職活動ならびに就業活動に臨むことができるようになる実践的な学習の機会として位置付けている。そこで本研究では、専門教育プログラム受講者向けの実践的なインターンシップの産学連携支援方法について考察する。

2. 研究の目的

2013年にHiRCが実施した企業、大学キャリアセンター、学生を対象としたインターンシップに関する意識調査から3者間の連携それぞれに課題があることが明らかになった⁽³⁾。(1)待遇や学生の扱い、情報の不足など企業側に改善が必要な問題。(2)実施時期と授業との兼ね合いなど、大学と企業の両方で改善につなげられなければならない問題。(3)インターンシップの効果が上がるように、学生の目的意識を明確にさせるなど、大学と学生個人の課題。そこで本研究では、実践的インターンシップを実施するに

あたって必要な支援をインターンシップの事前段階、実施段階、事後段階に分けて考察する。

3. 先行事例の知見

インターンシップについてハンドブックを公開している北米のブリガムヤング大学と、インターンシップにSNS環境を利用しているオーストラリアのロイヤルメルボルン工科大学の事例から産学連携で考慮すべき点を検討する。

まずブリガムヤング大学には、インターンシップに関する取りまとめを行うインターンシップオフィスが存在し、インターンシップを実施する意義を大学、学生、企業の立場から説明し、実施前の研修や実施中の指導評価についてガイドラインを提出している。インターンシップ実施前のオリエンテーションでは、履修方法、課題、評価、担当教員との連絡方法、保険、契約、不測の事態への対応などの説明をすることがガイドされている。学部や学生と受入先とは、インターンシップに関する覚書きを交わし、保管することを義務付けている。インターンシップ実施期間中は、学部にインターンシップのアドバイザーを設置し、受入先に電話をしたり、訪問したり、学生にインタビューしたりして、インターンシップの状況を把握し指導することを推奨している。一方、受入先企業にも、学生の学習目標を理解し、インターンシップのアドバイザーに学生の出席状況を含め、定期的にレポートすることが求めている。評価には2つのレベルが存在し、(1)アンケート形式で学生自身が自分の経験を評価するもの、(2)受入企業が実施中に最低2回は学生の活動評価するもの、そして、学部として全体的な取組について評価を行っている。学部は、学生への評価、フィードバックのために、受入先企業と連絡を取るよう義務付けている。

次にロイヤルメルボルン工科大学で行われているソーシャルメディアを活用したインターンシップ

プログラムの概要について説明する。同大学では、インターンシップという用語は使わず、enterprise-learning という表現を使っている³⁾。概要としては、企業での現場での実習時間(週 3-4 時間)以外にソーシャルメディアで企業とのつながりを持ち、ネット上で実務経験を得たり、その経験を共有したりするものである。学内で選考された学生と協力企業が Yammar というソーシャルメディアでコミュニティを形成し、12 週間にわたり実習を行う。学生は、大学に授業料を払うが、企業からは賃金は得ない実践的な学習体験を主としたものとなっている。学生の活動については、大学側の担当者と企業側の担当者と評価され、その結果に応じて、単位を得ることができる。

先行事例の調査から、産学連携体制を支援するためには、インターンシップの事前段階から関係者間のレディネスを高めることが効果的であると考えられる。また評価は、企業、学生、教員それぞれが実施し、時間の経過とともに蓄積される。省察においては、多段階で実施するのが効果的と考えられる。本研究では、上記 2 点の支援に e ポートフォリオを活用し、実践結果をもとに有効性を検証する。

3. 研究方法

3.1 調査期間

本研究では、2014 年 8 月 8 日から 8 月 14 日に実施する朝日ネット株式会社におけるインターンシップの実践結果をもとに考察を行う。e ポートフォリオを利用するのは、インターンシップに関わる企業担当者 5 名と、資格認定科目の担当教員 3 名、学生 4 名、産学連携を支援するコーディネータ 4 名の合計 16 名である。e ポートフォリオ利用期間は、インターンシップの事前研修を行う 6 月 25 日から事後研修を行う 9 月 25 日までとした。

本研究では、事前、実施、事後に関係者に意識調査を行い、期間中の e ポートフォリオの有用性に関する認識の変化を調査する。また e ポートフォリオのアクセス履歴を解析し、特に利用されているデータがどのようなものであったかを考察する。

3.2 e ポートフォリオの設定方法

e ポートフォリオとして利用するのは、朝日ネットの manaba folio とした。manaba folio の設定方法は以下である。まずインターンシップを科目として登録し、科目の受講生として学生 4 名を登録する。企業関係者及び資格認定科目の担当教員を教員として登録し、コーディネータは補助教員として登録する。登録した関係者は、プロフィール情報を登録する。この設定によりインターンシップに参加する学生は、e ポートフォリオにログインすると資格認定科目の他にインターンシップ科目が表示される。インターンシップが専門教育プログラムの一環であると認識する効果が期待される。

企業担当者及びコーディネータは、インターンシ

ップ実施前から、学生のプロファイル情報が閲覧できるとともに、事前課題を閲覧することができる。これらの設定により関係者のインターンシップ実施に関するレディネスを高める効果が期待される。

3.2 アンケート調査方法

1986 年に Davis が提唱した技術受容モデル³⁾では、ICT の利用行動を説明する上で「知覚された有用性」と「知覚された使い易さ」という 2 つの信念が重要であることが指摘されている。そこで e ポートフォリオに関する認識調査では、Davis ら調査を参考に設問 1~5 を事前・実施中・事後で実施する。

設問 1: 学生のプロフィールを閲覧できることは、活動に有用である。

設問 2: 学生の提出課題を閲覧できることは、活動に有用である。

設問 3: e ポートフォリオ上での学生と関係者とのやり取りを閲覧できることは、活動に有用である。

設問 4: 教員が e ポートフォリオのメンバにいることは、活動する上で有用である。

設問 5: キャリア支援の専門家が e ポートフォリオのメンバにいることは、活動する上で有用である。

4. 研究の結果と今後の課題

現時点では e ポートフォリオの設定と事前アンケートを実施しただけであるが、発表では、アクセス履歴を分析し、より詳細な結果を発表したい。本報告では、コーディネータの支援方法については詳細な検討はなされなかったが、コーディネータを支援することが産学連携の協働を促進し、結果としてインターンシップの質保証に寄与する可能性がある。今後は、e ポートフォリオの活用方法と共に、コーディネータの支援方法についてより詳細な研究を進める予定である。

謝辞

実験の実施に際してご協力をいただきました株式会社朝日ネット様に深く御礼を申し上げます。

参考文献

- 1) 文部科学省高等教育局専門教育課 平成 25 年インターンシップの普及及び質的充実のための推進方策について意見のとりまとめ
- 2) 中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」2011.
- 3) 新目真紀, 半田純子, 合田美子, 長沼将一, 玉木 欽也: 情報通信サービス業を中心とした実践的インターンシップ実施時の産学連携体制に関する考察, 教育システム情報学会 No.189, 2014.
- 4) David H. Gilbert : Using Social Media as a Tool to Drive Collaboration, Enhance Critical Reflection and Engender Improved Socialization Outcomes in Enterprise. 12th Annual Conference. 2014 Conference Proceedings (pp.1029-1045), 2014.
- 5) Davis, F.D.: Perceived usefulness, perceived ease of use, and user acceptance of information technology, "MIS Quarterly, 13 (3), pp. 319-339, 1989.